婦人の目

御父と私を結ぶもの

藤屋　紀子

昌子さんの死の瞬間は、私に大きな安心と喜びを与えてくれた。片肺はガンに完全におかされ、残された肺も三分の一くらいしか機能せず、ちょっと動くのも呼吸が困難な状態にありながら、彼女は突然両手を高くあげ、大声で「ああ、楽しかった。さあ歌って、歌いましょう」と叫び聖歌を歌いながら死んだというのである。

一年間に二度の手術、それと前後して最も彼女を苦しめたのは、自分が疎外されている、と感じていたことであった。小さないさかいがあったその日から、彼女はキリストと共に心も体もゴルゴタの丘へと登りはじめたようだ。

だれにも内緒で毎週一度私の家を訪れ、聖書を聞き、祈り、聖歌を歌った。入院してからも、「病院に来なくてもいいわよ。よくなったらすぐお宅へ行くから」と言いながらも、私が訪問するのを首を長くして待っていた。が突然食物を受けつけなくなり、広島の大学病院に移され、そこでなくなった。

通夜の席で彼女のお姉さんは「昌子はね、緑色の小さなビンに入ったものを大切にしていましてね。痛みがはじまるとそれを取って縦と横に線をひき、何かぶつぶつ小さな声で言ってるんですよ。何なのそれは？と聞くと、『ウンこれはね、おまじないなの、これを塗ると心が安まるの』そういいましてね」とだれともなしに話された。

昌子さんの生家も嫁ぎ先もすべて信者ではなかったので彼女はあえてキリスト教のことを、だれにも話さなかった様子であったが、死の二年前くらいから急に教会へも足しげく通いはじめ、その頃から私とのつき合いも始まった。そして、彼女がおまじないといって使っていた聖香油は、私が彼女に渡したものだった。

私はお姉さんの話を聞き、昌子さんの死は本当に悲しくはなかった。その静けさと喜びは、言葉ではとうてい言い表されるものではなかった。その聖香油を私が渡したことも、それが何であるのかも、とうとう私は言わなかった。

今、昌子さんを通して死者のために祈る時、それは御父と私を結ぶ道となり、安らぎと静けさの満ちたりた思いが満ちあふれ、神は必要な時、必要な人に現れるという確信を得たような気がしている。

（主婦）